

## 2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	乳幼児期における他児との笑い合いの発生プロセスの解明
キーワード	①乳幼児、②他者、③笑い

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	フジノ マサカズ 藤野 正和	所属等	長崎短期大学 保育学科 講師
プロフィール	九州大学人間環境学府人間共生システム専攻臨床心理学指導・研究コース単位取得後満期退学。現在、長崎短期大学保育学科講師。専門は臨床心理学及び特別支援教育。研究領域は重症心身障害児・者への心理教育的援助の開発を行っているが、それらの支援に生かすために乳幼児期の他者との作用についても研究を行っている。		

### 1. 研究の概要

これまでの研究において笑い合うということは、笑いの要素の一部として取り上げられることが多かった。しかし、笑い合いには互いに笑顔になるという要素と同時に、笑いによって想起される情動を共有するという要素が含まれている。特に、後者の要素については、幼児期以降の仲間関係の形成において重要な意味を持っており、複雑化していく他者との相互作用において重要な役割を果たすと考えられる。

本研究では、乳幼児期における他児との笑い合いについて検討を行うために、対象別の笑いの様相を明らかにするとともに、他児との笑い合いがどのように起こるのかについて調査を行った。笑いの対象については、2歳～3歳にかけて笑いの対象の中心が他児へと移行していくこと、笑いの種類については、一貫して他者に微笑むもしくは笑いかけるものが多いことが示唆された。また、1歳未満の乳児においても、他児との笑い合いが起こる様子が見られ、他児との笑い合いが起こった場面を質的に分析したところ、対象Aが対象Bの行為を見ている状況、もしくは対象Aと対象Bが行動をともにしている状況から笑い合いに発展していた。

### 2. 研究の動機、目的

#### (1) 研究の動機

発達の早期における笑いは、自発的微笑や社会的微笑が中心であり、その後の社会的な認知発達に伴い、乳児期から幼児期にかけて様々な笑いが見られるようになる。しかし、保育現場等で乳児の様子を観察していると、大人（保育者）に対しては笑いかけ（もしくは大人と笑い合う）様子が見られるが、他の乳児に対して笑いかける（もしくは笑い合う）様子はあまり見られなかった。乳幼児の笑いに関する研究においては、笑いが他者に対して能動的に用いることができるようになるのは2歳以降であることが示唆されている。以上のことから、乳幼児は笑いを対象に応じて使い分けているのかということと、もともと他者（大人など）から援助やかかわりを引き出すことに用いられていた笑いが、どのような過程を経て、他児との笑い合いに発展するのかということについて問題意識を持った。

#### (2) 研究の目的

本研究では、乳幼児期における対象別の笑いの様相を明らかにするとともに、他児との笑い合いがどのように起こるのかについて明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の結果

今回の研究では、地域の小規模保育所に調査を依頼して保育場面における乳幼児の観察を行った。観察対象は、0歳児クラス7名、1歳児クラス15名、2歳児クラス10名であった。観察期間は、X年6月～12月の期間であった。なお、0歳児クラスについては園の都合により、9月～12月の3ヵ月のみであるため、今回は参考として記載している。観察時間については、午前9時～午前11時までの2時間であり、そのうち自由遊びの時間に限定して分析を行った。

#### (1) 乳幼児における対象別の笑いの様相についての検討

各クラスにおける笑いの数の総数については、0歳児が106回、1歳児が374回、2歳児が342回であった。

笑いの対象については、0歳児クラスでは「大人への笑い」、1歳児クラスでは「大人への笑い」、2歳児クラスでは「他児への笑い」の比率が高かった。笑いの種類については、0歳児・1歳児・2歳児クラスのすべてにおいて「一方的笑い」の比率が高かった。

各クラスにおける笑いの種類のうち、比率の高かった上位3つについて、笑いの対象の比率を検討した。その結果、0歳児クラスでは、「一方的笑い」「接近笑い」で「大人への笑い」が、「行為失敗笑い」で「モノへの笑い」が高かった。1歳児クラスでは、「一方的笑い」「身体的笑い」で「大人への笑い」が、「移動笑い」で「対象不明への笑い」が高かった。2歳児クラスでは、「一方的笑い」「退散笑い」で「他児への笑い」が高かった。

この結果から、笑いの対象については、2歳～3歳以降にかけて笑いの対象の中心が他児へと移行していくことが示唆された。また、笑いの種類については、一貫して他者に微笑むもしくは笑いかけるものが多いことが示唆された。

#### (2) 乳幼児期の他児との笑い合いの発生プロセスの検討

他児との笑い合いについて検討するため、他者との笑い合いに相当する「同調笑い」の対象の比率について検討を行った。その結果、「同調笑い」については、0歳児クラス及び1歳児クラスでは大人に向けられたものの比率が高いが、2歳児クラスでは他児に向けられたものの比率が高くなった。しかし、0歳・1歳児クラスにおいても、他児との笑い合いは見られており、また1歳未満の乳児においても他児との笑い合いが起こる様子が見られた。他児との笑い合いが起こった場面を質的に分析したところ、対象Aが対象Bの行為を見ている状況、もしくは対象Aと対象Bが行動をともにしている状況から笑い合いに発展していた。この傾向は、0歳～2歳児クラスまで一貫した傾向が見られた。

### 4. 研究者としてのこれからの展望

本奨励金の研究で得られた結果をもとに、さらに乳幼児の他者との相互作用について研究を進めていきたい。今回の研究では、他者との笑い合いについて検討を行ったが、他者をみるまなざしが他者との相互作用を起こすことにつながるということが考えられた。今後は重症心身障害児・者への援助につなげていくためにも、他者へのまなざしを中心に、その他他者を意識する方法について研究を広げていき、重症心身障害児・者の援助の開発につなげ、重症心身障害児・者のQOLの向上につながるような研究成果を残していきたい。

### 5. 社会に対するメッセージ

今回の研究は、重症心身障害児・者との関わりの中で得られた経験と保育現場における観察から問題意識をもったものである。意思表示をすることの困難な障がい児・者と、他者にことばで思いを伝えることの難しい乳幼児は、関わり手から理解が不可欠である。

今回の研究を通じて、実際に起こっている現象を的確に読み取り、客観的に分析していくことの重要性を再認識した。今回の研究を支援してくださった方々に感謝を申し上げるとともに、今後さらに研究を深めていきたい。